『日本文学史を編みなおす〈古代篇〉2』

LIBRARY IICHIKO 163 SUMMER 2024　7月31日 発売予定

文学理論において、構造論がある意味で後退したというか先を開ききれなかったのは、言語領域に対してソシュール水準にとどまり、ヤコブソンやロシア・フォルマリズムから記号論的なものへの滑りないし社会科学的還元へと落ち込んだためと思われる。そこに対してデリダ、ポール・ド・マンの文学理論が対峙的に出現したが、それもまた言語学的な限界にある。つまり、主語制言語世界とそのシニフィエ優位の大学言説の次元から、不可避にもたらされた限界で、語り手と言説の主体とが一致するか否か、言語学外は何か、などの批評次元に規制されてしまっている。言説界が言語学界の限界を抱え込んでしまったためだ。そこに、哲学言説の限界も絡んでしまう。

ある意味、ラカンのみが、その臨界を感知していた。先の本誌、サントームの特集で、ジョイス論は避けてくれとお願いしたのも、ここの臨界閾で誤認転倒が不可避に起きるであろうと踏んだからだ。

言説の規準地盤を「日本文学」において、その文学論・物語の組み直し、文学史の編み直しが、いかなる次元にあるのかをしっかり踏まえて、そこを通過させて、ラカン文学論を新たな可能地平へと開かねばならない。ここが、西欧言説と日本言説との間における本質的・言語学的な可能態の穴になっているはずだ。心的なもの、言説的なものと、エモーショナルなものの関係である。述語制言語の哲学・文学論・言語学が開かれていく射点である。日本語が潜在的に領有している普遍の場所になる。

これは、すでに構造化されている日本文化技術やアート技術に対応するもので、さらには生命技術、情報技術にも活用されていくことにつながりうる。ＡＩは、分離の客観技術、主語制概念でしかなされていない。

本誌は創刊以来、近代学問体系の地盤転移に取り組んできた。そこから見出された、主客非分離、それを可能にさせている述語制の言語作用、そして場所の文化環境、隠れて大きく作用している非自己のエモーショナル世界の新たなエピステーメの総体がある。そこから、文化資本経済と場所環境統治アートのマネジメントが開かれていく。

本誌が３８年間取り組んできた世界、それはまだまだ未踏のものがあるが、現実の具体作用にいろんな局面で動き始めている。とくに、若い人たちが、既存世界に強い限界を感じとっている。そこを切り開いていく知的資本が本誌の歴史蓄積にあると、アプローチされてきている。ようやく具体実際的な本格的取り組みが始まっている。

知的資本の市場、文化資本の市場、そして場所資本の市場は、市場本来の世界を新たに開く。市場とは経済範疇ではないのだ。市場の震源地は場所にある。経済は、生存に関わるものとしてかかる市場から動いている。ポリティクスが浮遊してしまっているのは、これらの市場に取り組めていないからだ。

文学は、眠りの趣味ではない。

▼鈴木貞美・古橋信孝・三浦佑之・藤井貞和「日本文学史を編みなおす〈古代篇〉2」▼兵藤裕己「中世仏教史の課題と物語史」▼鈴木貞美「日本のナラトロジーへ4」▼山本哲士「文学理論生産の哲学と社会科学（draft）」▼カラー特集「花の絵に彩られた村」

「LIBRARY IICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二四年一〇月末発行予定

A5 変形　128 頁　1650 円（本体＋税 10%）

【監修・アートディレクター】
河北秀也（かわきた　ひでや）
1947 年生まれ。日本ベリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士（やまもと　てつじ）
1948 年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『〈もの〉の日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』『フーコー国家論』ほか多数。

文化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com　　ehescbook.com

ご注文はJRCへ→ Fax. 03-3294-2177

貴店名

部数　　冊

文化科学高等研究院出版局　tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

日本文学史を編みなおす〈古代篇〉2

LIBRARY IICHIKO 163 SUMMER 2024　1650円（税込）

ISBN 978-4-910131-42-9 C1010 ¥1500E